

ローマ人への手紙6章6-11節 「十字架につけられ、キリストに生きる」

1A 十字架につけられた古い人 6-7

1B 罪のからだの滅び 6

2B 死んだ者の解放 7

2A キリストにあって生きる者 8-10

1B 共に生きる 8

2B 死が支配しないよみがえり 9

3B 神に対して生きる方 10

3A 「認める」 11

本文

ローマ人への手紙6章を開いてください。私たちは前回、6章 1-5節を見てきましたが、今朝は6節から 11節までをじっくり見ていきたいと思います。午後に 12節以降を学びます。一度、すべてを読んでみます。「⁶私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだを滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。⁷死んだ者は、罪から解放されているのです。⁸私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなる、と私たちは信じています。⁹私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです。¹⁰なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。¹¹同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。」

私たちは6章から、キリスト者の罪から離れた生活、聖化とも呼ばれますが、罪の支配を受けない生活について学んでいっています。福音が、信じる私たちを救う神の力であるわけですが、その力は単に、地獄に行かず私たちを天国に連れて行く力だというだけに捉えてしまえば、全く不十分です。罪に対する神の怒りから救われるだけでなく、その罪の力からも救われているのだということです。

罪から離れた生活をするのに、何をすればよいのでしょうか？パウロは、初めに「知る」ことだと教えています。6章 3節を見てください、「それとも、あなたがたは知らないのですか。」とパウロが言っていますね。私たちが罪から離れる生活を送る時に、第一に必要なことは「知る」ことなんです。実は、もう罪に対して私たちが死んでいる。罪に支配された生活から切り離されている、ということなのです。私たちが、あたかも罪と死の力の中にまだいるかのように生きてはいけません。もうすでに、罪に対しては死んでいます。罪から自由にされています。

こうして、自分が罪に対してすでに死んでいることを教えていますが、何を知る必要があるのかと言えば、「バプテスマ」です。これは、浸すという意味で、全身を水で浸し、そのことでユダヤ人の中では新たに生まれることを意味していました。それをパウロは、イエスの名によって受けるバプテスマは、「キリストについて、その死といのちにあずかるバプテスマ」と定義したのです。自分がキリストに結びついています。キリストが死なれて、墓に葬られた時に、罪に支配された自分も死に、葬られました。その水は、墓をいわば表しています。そして、キリストが墓からよみがえられたら、私もキリストにあって、新しい命が与えられた、ということです。

私たちが、1章から5章までで、「義と認められる」ことについて見て行きましたね。神の前で罪人ではなく、罪を犯したことがない者のようにみなされています。この時に大事なものは、「キリストが、私たちのために死なれた。」ということでした。神がキリストにあって、私たちのためにしてくださった恵みに基づいています。5章の後半から、パウロは、「キリストに結ばれた恵み」について話しています。キリストが私たちのために死んでくださっただけでなく、私たちが、キリストと共に死ぬようにしてくださったのです。キリストと一つにされたという、大きな恵みがあるのです。ですから、キリストが死なれ、葬られた時に、罪に支配された自分も共に死に、葬られたのです。このことを知る必要があります。

そして6節からは、この「キリストと共に死んだ」ということをさらに掘り下げて、「キリストと共に十字架につけられた」ということについて見ます。死んで葬られたのを表しているのがバプテスマですが、その前にキリストが十字架に付けられたから、死なれました。キリストが十字架につけられていた時も、実は私たちが十字架につけられていたのだ、ということなのです。

1A 十字架につけられた古い人 6-7

1B 罪のからだの滅び 6

6 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだ滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。

パウロは、「私たちがキリストとともに十字架につけられた」と言っても、「**古い人が**」つけられた、と言っています。この古いというのは、5章後半で教えていた、「**アダムにある人**」のことです。アダムが罪を犯したことによって、世界に罪が入り、罪が入ったので、死が入りました。アダムにあって、人は罪と死の支配の中にありました。罪と死の支配にいる自分が、「**古い人**」です。古い人がいるなら、新しい人もいるのか？と思われるでしょうか、はい、います。神に対して生きる自分は新しい人です。それは後で出てきます。

この古い人はキリストが十字架に付けられていた時に、共に付けられていたのです。前回、人間的な言い方をしましたが、「この人は、死なないと直らない」という言い方がありますね。そうです、死ななければ直らないし、しかも、どんなにじたばたしても、身動きできない十字架の上で殺され

なければいけなかった、ということです。私たちは、罪に支配されている自分を、どうにか改善したいと思ってしまいます。けれども、死なないと直らないのです！改善するのではなく、十字架に付けるのだ！ということです。「ガラ 5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」私たちの肉の欲望や情欲は、そんなこんなで大人しくするものではありません。キリストが十字架につけられた時に、これらがすべて磔にされていた、ということです。だから希望があります。私たちは罪に従う必要がなくなったのです。

「**罪のからだ**が滅ぼされて」とあります。罪のからだとは、罪に支配された体ということです。これが滅ぼされるのですが、なくなるということではなく、無力化されると言ったらいいでしょう。そこに存在するのですが、無力にされたということです。存在はするのですが、機能しなくなったのです。からだはあるのですが、もはや罪に支配されていません。

そこで、「**私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。**」と言っています。罪の奴隷という言葉は、かなり強い言葉ですが、けれども、イエス様はユダヤ人に「ヨハ 8:34 罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」と端的に仰っています。これを聞いていたユダヤ人は、自分はまさか奴隷ではない、だれの奴隷にもなったことがないと言います。そうですね、自分は自分で物事を決めて、自由な存在だと思っています。いいえ、実は罪を犯さざるをえない奴隷状態なのだ。それは、罪を行っていることによく表れているのだ、ということです。この話は、ユダヤ人たちとイエス様がやり取りをして、ついに、イエス様に石を投げようと彼らがします。イエスを信じるといっていたユダヤ人が、最後は殺意を抱いていたのです。自分は、奴隷なんかではない、自由人だと思っても、罪を犯さざるをえない状況の中で、罪の奴隷なのです。

2B 死んだ者の解放 7

7 死んだ者は、罪から解放されているのです。

非常に興味深いことばです。死んだ者が、どうして罪から解放されているのでしょうか？これを例えて説明します。凶悪犯が、警察と銃撃戦になりました。犯人は警察の銃弾で死にます。その死体が横たわっていますが、その周りに、彼が生前、行っていた罪のものを大きめました。アル中だったので、お酒の瓶を置きます。またポルノ中毒でもありました、ポルノ雑誌を置きます。いかがでしょうか、彼は貪欲や情欲に駆り立てられますか？いいえ、既に死んでしまっているので、これらの罪から解放されているのです。

2A キリストにあって生きる者 8-10

このようにして、私たちの古い人は十字架にかかりました。罪のからだは滅びました、無効化されたのです。だから、罪の奴隷でなくなっています。自由にされたのです！それだけではありません。私たちに、新しい命が与えられました。それは、キリストにある命、よみがえりの命です。

1B 共に生きる 8

8 私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなる、と私たちは信じています。

ここで強調されているのは、「**ともに**」です。先ほど説明しましたように、キリストが私たちのために死なただけでなく、私たちがキリストと共に十字架につけられました。そしてキリストと共に、死んだのです。キリストはどうになりましたか？よみがえりました。キリストに結ばれている私たちは、ゆえに共に生きることになります。これは、終わりの日に実現します。キリストに結ばれているのだから、この方がよみがえられたのだから、終わりの日に死んでも生きるとい希望があり、そう信じているのです。

そして、その復活の希望が、先んじて、御霊によってその力として受けとることができているのです。ペテロのことを思い出してください。彼は、イエス様がユダヤ人の裁判を受けている時に、火にあたっていて、女中に、あなたはあの人の仲間でしょ？と問われた時に、知らないと言ったのです。三度も言いました。同じユダヤ人の裁判に、ペテロとヨハネが連れて来られました。そして下手をすると、人々を惑わした罪で殺されるかもしれないのです。ところがペテロは、「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。」と言ったのです。この変わりよう、大胆さはいったいどこから来ているのでしょうか？

4 章 13 節に、「また、二人がイエスとともにいたのだということも分かってきた。」とあります。正確には、二人がイエスとともにいるのです。イエスが共に生きておられたので、ペテロはこれほど大胆になれたのです。キリストと共に生きるとはこういうことです。御霊によって、キリストが共に生きておられるということであります。「エペ 1:19-20 また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。20 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、…」キリストをよみがえらせた大能の力が、信じる者に働いているのです。

2B 死が支配しないよみがえり 9

9 私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです。

再び、「**私たちが知っています。**」という言葉になっています。罪から離れていくのに必要なのは、まずは「知る」ことです。ここで知ることは、キリストは「**もはや死ぬことはありません。**」ということです。よみがえり言っても、ヤイロの娘や、ラザロがよみがえった時は、いずれ死んでいったはずで、いつまでに生きていたのではありません。けれども、キリストはよみがえられたら、もはや死ぬことはないのです。今も生きておられるのです！

このようにして、「死はもはやキリストを支配しない」のです。アダムから入った罪と死の支配に対して、キリストはその力を亡き者にしたということです。死に打ち勝ち、もはや支配することはないのです。イエス様がよみがえられたのは、紀元後 30 年頃。その 60 年ぐらい後に、使徒ヨハネはパトモス島というところに流刑になっていました。そこで、天からの啓示を受けます。それは、栄光に輝く主の御姿でした。ヨハネは倒れます。イエス様は引き起こします。そして言われます、「黙示 1:17-18 恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」60 年たっても、いや、世々に渡り、ずっと生きている方があります。死の力は、キリストには及びません。

3B 神に対して生きる方 10

¹⁰ なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。

「**ただ一度**」という言葉がここでは大事です。「ヘブル 10:10-14 このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。11 さらに、祭司がみな、毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返し献げても、それらは決して罪を除き去ることができませんが、12 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、13 あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。14 なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。」つまり、罪の赦しの効力は途中で半減するものではありません。永遠に全うされたのです。このようにして、イエス様は、罪に対して一度、死なれて、罪の力を滅ぼされたのです。

そして、「**キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられる**」とあります。イエス様は、十字架に付けられる前に、ガリラヤから宣教を始められ、力強く働いておられました。父なる神に対して生きておられました。それが、エルサレムにて最期を遂げます。しかし三日目によみがえられます。弟子たちに、ガリラヤに行きなさいと言いつけておられました。そこにイエス様はおられました。ガリラヤ湖の岸辺で、魚を焼いていましたが、ペテロが夜通し、釣りをしていましたが、一匹もとれず、けれども、「右側に網を降ろしなさい」と言われました。それで、降ろすと大漁になりました。それで、ヨハネが「主だ」と叫びます。そう、イエス様は再び神に対して生きておられたのです。もはや、死によってご自身が神に対して生きるのを妨げられることはないのです。

3A 「認める」 11

このようにして、ただ一度で罪に対して死なれ、もはや死に支配されることなく、今にいたるまで神に対して生きておられるキリストがおられます。この方と共によみがえったというのが、パウロの話なのです。

¹¹ 同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対し

て生きている者だと、認めなさい。

ここで、「認めなさい」という命令をしています。先ほどは、知ることを話していましたね。ここでは、「認めなさい」あるいは「みなしなさい」とも言えるでしょう。このことばは、「義と認める」の「認める」と同じです。つまり、ここでは実際は違うけれども、そう見なすということなのです。罪がまだ自分を襲ってきても、それでも、「自分は罪に対して死んだ者」とみなすのです。そして、「神に対して生きている者」、すなわち、よみがえりの力で生きて、キリストが神に対して生きておられるように、生きているとみなすのです。そうなっていないと感じても、どんなことがあっても、実際は、罪と死の支配から解放され、義といのちの支配の中に移っているのですから、そうなんだとみなします。

私が信仰をもって、しばらく何年も起こっていたことをお分かちします。私は、大学受験のための勉強で抑うつ的になり、その時の衝撃が残っていました。信じてからも、生々しい夢を見ました。それは、受験が近づいていて、受かる見込みがないという切羽詰まった夢です。あまりにも生々しいので、起きてからもしばらく、自分が大学に既に入っていることを確認しないとイケないほどでした。それは、大学を卒業してからもしばらく続けました。その時は、大学に入学できたところか、卒業までしているのだと、思って確認しないとイケないほどでした。その時に私は、疑いがよぎりました。「クリスチャンになっても、何も変わっていやしない。」自分に変化が与えられるはずなのに、何ら変わっていないではないか？ そう思った時に、私は、「それでも、私は神に愛されている」と宣言しました。心の中ではっきりと、そう言い聞かせたのです。何も変わっていないのに、図々しくも「神に愛されている」と宣言したのです。事実、みことばによればそうなのですから。そうやっているうちに、いつの間にか夢は見なくなりました。

ここで、はっきりさせましょう。人はしばしば、「行いよりも、自分の姿」が問われます。なぜならば、自分の性質が表に出て来るからです。自分が罪を犯す時、罪人だから、罪の性質があるから罪を犯します。同じように、自分が義の行いをする時、すでに義と認められ、罪に対して死んでいるから、だから、罪を犯さなくなっていくのです。どんなにきれいごとを言っても、心が汚れていたら、必ずそれが出てきます。反対も正しいのです。つまり、新しい人に変えられているからこそ、その姿が行いに反映されるのです。ここを、英語ではアイデンティティーと言います。自分が何についているのか？ 自分の所属はどこなのか？ どの性質をもって生まれているのか？ そういった、自分とは何かを示すものをアイデンティティーと呼びます。自分が、キリストに結ばれた者であって、罪と死の支配から解放されているから、事実、罪から離れた生活を送ることができるようになるのです。だから、「自分はキリスト者なのだ」という自覚が、少しずつキリストにかなった生き方をしていくことができます。

すでに、自分はキリストにあって新しく造られた者なのです！ この新しい性質があるから、そこから良い実が結ばれていきます。この、「認める」「みなす」という作業を始めていきましょう！